



TITLE:

シュンペーターの資本主義論

AUTHOR(S):

鎌倉, 昇

CITATION:

鎌倉, 昇. シュンペーターの資本主義論. 経済論叢 1953, 71(5): 331-351

ISSUE DATE:

1953-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132299>

RIGHT:

經濟論叢

第七十一卷 第五號

計画經濟の諸問題 …………… 木 原 正 雄 (1)

シュンペーターの資本主義論 …… 鎌 倉 昇 (18)

資本の絶對的過剰生産について

………… 吉 信 肅 (48)

[昭和二十八年五月]

京都大學經濟學會

シュンペーターの資本主義論

鎌倉昇

二十世紀は「戦争と革命の世紀」といわれている。また「機械と國際鬭争の時代」ともいわれている。いずれにしても、われわれの身のまわりには危機が濃厚な密度をもつて立ちこめている。高率の漫性的失業、階級對立の激化、國家の經濟への介入、大國間の軋轢の深刻化、東亞諸地域における民族運動の蔓延等々。

今日ほど資本主義と社會主義の問題が切實な關心をもつて眞剣に考えられたことはかつてない、といわれているが、それはまさに、このような危機感が前例のない強さをもつて、われわれの身近かに威壓を加えているからに他ならない。この切實な今日の問題について、われわれに多くの示唆を與えるものはJ・A・シュンペーターの深く且つ鋭い分析である。ここではつぎの諸論著を利用してシュンペーターの見解を要約し、若干の吟味を加えようと思う。

A *Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, 1906. 邦譯、木村健康・安井琢麿「理論經濟學の本質と主要内容」

B *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1935. 邦譯、中山伊知郎・東畑精一「經濟發展の理論」

C *Business Cycles, A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 vols, 1940-1941

シュンペーターの資本主義論

第七十一卷

三三一

第五號

二三

D *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1942 邦譯「中山伊知郎・東畑精一」資本主義・社會主義・民主主義」

E *The March into Socialism (Papers and Proceedings of the Sixty-second Annual meeting of the American Economic Association, New York, December 27-30, 1949) American Economic Review*, May 1950.

F *English Economists and the State-managed Economy, Journal of Political Economy*, October 1949.

一 シェンペーターにおける經濟の世界

かつてベルグソンは社會進歩の原動力を少數の人々の努力と洞察とに歸せしめたことがある。すなわちベルグソンは、停滯的な社會を「閉じた社會」と呼び、これに對して、進歩を伴う「開いた社會」を考える。閉じた社會と開いた社會とは全く異質的なものであり、前者が「慣行の安易な斜面に沿つて滑ろう」とする「閉じた魂」の持ち主によつて擔われるのに對し、後者は「すぐれた一人ないし數人の忍耐ある努力」にささえられる。このすぐれた一人ないし數人こそ「開いた魂」の持主であり、これを英雄とも、あるいは聖者とも呼び得るであらう。この英雄あるいは聖者の呼び聲は群衆の情緒に訴え、群衆を引きずつて行く。ここに創造があり、社會の進歩が生れる。これがベルグソンの社會進歩に對する見方であるが、タルドやパレトの見方もこれと多くの共通點をもっている。

さて資本主義社會をそれ以前の社會と較べるとき、後者における停滯に對して、前者における發展が、きわ立つてわれわれの注目をひく。シェンペーターは、資本主義社會における生産の飛躍的發展を擔うものとして、「企業者」に注目し、その發展への衝撃として「經濟上の新機軸」を考えた。このシェンペーターの經濟世界に對する見方も、ベルグソンによつて代表される上述の見方と著しい共通性を持つてゐる。いなむしろシェンペーターは、ベルグソン流の見方を、經濟の世界に擴充、適用したものと見得る。ベルグソンにあつて英雄あるいは聖者と呼ばれ

たものはシュンペーターにあつて企業者であり、前者の「創造のための忍耐ある勇氣」にあたるものが、後者における「經濟上の新機軸のための不撓の努力」である。

周知のごとく、シュンペーターは資本主義をつぎのように定義している。

▲資本主義は、借入金によつて經濟上の新機軸がまかなわれるような私的性格の經濟である。この借入金は必ずしも信用創造を意味しないが、一般的には信用創造による。²⁹⁾ ▼

この定義は一見われわれの常識的に理解している資本主義とは距りがあるように見える。しかし細かく吟味すれば、この定義は資本主義の一面、しかもその重要な一面を鮮かに描き出していることがわかる。然もこの定義は、經濟の世界に對する上述の彼の見方を、最もはつきりと示している。われわれは、まずこの定義の含意を明かにすることから始めようと思う。

シュンペーターの資本主義の定義において、まず注目をひくのは經濟上の新機軸への著目であり、ついでそれが借入金によつてまかなわれると見る點であり、さらにこの借入金は信用創造によつて供與されるのが一般的であるとする指摘である。これら三つの點は極めて重要であるから、かなり多くの紙幅を費して、順次に明かにしよう。

シュンペーターは經濟的行爲を二つの型に分ける。その一つは、與えられた條件に適應することによつて、もつとも有利な結果をひき出す行爲である。したがつて與件が變化すれば、合理的に對處して、もつとも有利な結果を得ようとする。その意味でシュンペーターはこれを合理的な行爲という。³⁰⁾ この行爲はいわば受身の適應であり、その適應の仕方には慣行の軌道が存在する。これに對して、もう一つの型の行爲は、單に與えられた與件に適應して

有利な結果を求めるのみでなく、進んで動的・創造的に新機軸を生み出して行く行爲である。⁴⁾この後者の職能、すなわち新機軸を生み出して行く職能は、日常的な職能ではなく、これの遂行は特殊の過程であり、特殊のタイプの擔い手が必要とする。この擔い手こそがシュンペーターのいう企業者である。

さて慣行の循環においては、おのおのの經濟主體は自己の地盤を確信している。また自己の關係せざるを得ないすべての他の經濟主體の循環における態度によつてささえられている。さらにこれらの他の經濟主體の側からも自分に對して同様の態度を期待する。このような事情によつて遲滞なく合理的に行動し得る。これに反して、非慣行の問題に直面したときは、そういうわけには行かない。慣行の循環においては、潮流とともに泳ぐことが出来るが、慣行の軌道をはみ出したときには、潮流にさからつて泳ぐことになる。前の場合の支柱は後の場合の障礙となる。このような困難を打開するためには特殊の勇氣と決斷と洞察を必要とする。勇氣と決斷と洞察をもつて、あえて身を危険の中に投じようとするタイプの經濟主體こそがシュンペーターのいう企業者である。再びベルグソンの言葉を引合ひに出すならば、「安易な斜面に沿つてすべろう」とする一般の傾向にさからつて、「進歩の苦しい努力」を拂うものが企業者であるともいえる。その意味では、企業者には好んで危地に身を投じる軍人と共通したものがあつて、この点を目してシュンペーターは、その行爲を非合理的と特徴附ける。

いふならばマーシャルは *ordinary business of life* に著眼して經濟の世界をとらえた。⁵⁾シュンペーターはマーシャル流の日常的・合理的・適應的なセンスに對して、これと異質的なセンスを經濟の世界のいま一つの要素として導入し、これによつて“*economic progress*”の問題を解こうとしたと見得る。

(1) ここに要約したベルグソンの見方は、彼の「道徳と宗教の二源泉」および「笑」に一貫して述べられている。

(2) C. p. 223.

(3) シュンペーターが慣行の軌道にしたがう行爲を目して合理的としたことについては問題がある。この点後に論ずる。

(4) シュンペーターが經濟上の新機軸とよぶものには次のようなことが含まれている。(B. ss. 100—101)

- 一、新しい財貨の製造
- 二、新しい生産方法の導入
- 三、新販路の開拓
- 四、新しい資源の獲得
- 五、新組織の達成

(5) A. Marshall, *Principles of Economics*, 8th ed., p. 1.

二 信用創造の役割

いま上述のごとき企業者が新機軸を行うにあつて、「貯蓄された資本」を有する場合は今日の社會においてはむしろ重要な意味をもたない。企業者は自己の使用すべき財を獲得するために「自由なる購買力」を借入れねばならない。シュンペーターの定義に「借入金によつて新機軸がまかなわれる」という一節があるのはこの点に著目したものだといえよう。ただここではなぜ「貯蓄された資本」を有する場合が今日の社會においてむしろ重要でないか、について考えれば充分であらう。この点シュンペーターに説明がないわけではない。

シュンペーターの説明は主として純理論的な興味にもとづくものである。すなわち、シュンペーターは靜止的狀態の存在を出發点として、そこではまず完全雇傭が前提され未利用ないし未就業の資源は存在しないと考える。また靜態的均衡の想定は、利潤の存在を排除し、したがつて「貯蓄された資本」が充分存在する場合を考慮のそとにおかしめる。このような場合、新機軸をなしとげるためには、資源の用途の轉換が必須であり、それを行うには「自由なる購買力」の借入が不可欠になる。これが、シュンペーターの説明の主要である、しかし現實の問題につい

て考えるとき、シュンペーターも慎重に言及しているように、靜止的狀態を出發点にとる必要はない。したがつて完全雇傭の前提は不必要であるし、「貯蓄された資本」が、存在する場合を考えることもあながち不當ではない。このような狀態にあつても、なおかつ「借入金によつて新機軸がまかなわれる」ことを強調する理由は何であらうか。それは資本主義社會に於ける投資規模の増大である。企業において自己資本の位置が相對的に小さくなつたこと、いいかえれば企業の規模が次第に大きくなつたことが、この際考えあわされねばならない。

シュンペーターが資本とよぶものは、この「自由なる購買力」であり、これを供給することを自らの職能とするものが銀行である。一派の見解として銀行が支配し得るのはせいぜい短期資金の市場だけであり、新機軸の遂行をまかなうときは銀行の能力をこえることである」といふ見方がかなりに廣く支持されている。シュンペーターの考え方は、このような見方と眞正面から對立するわけである。

シュンペーターの考えを要約すればこうである。信用創造によつて企業者に與えられた「自由なる購買力」は新機軸の遂行のために財貨の用途を轉換せしめる。すなわち、新機軸をなしとげるために、すでに誰かが使用している財貨を吸収することが必要な場合に、それを實現せしめる方が信用創造である。このように財貨の用途を轉換せしめる機能を信用創造の轉置的作用とよぶならば、シュンペーターが、決定的に重要視するのはこの轉置的作用である。しかしこのほかに、いわば信用創造の添加的作用ともいふべきものがある。それは遊休の資源が存在するとき、これを吸収して生産のために動員する機能である。シュンペーターが重要視するのは、前者の轉置的作用であるが、後者の添加的作用を否定すべき理由はない。銀行システムはこれら二つの作用を通じて投資率を左右し得るのであり、信用創造が新機軸をまかない得るとみる根據もここにある。³⁷⁾

以上によつて、シュンペーターの資本主義の定義が、資本主義のいかなる側面を重視しているかは、ほぼ明かになったと思う。まず企業者による新機軸の遂行、それによつて經濟社會は靜止的狀態から發展の中へおかれる。しかしこの新機軸を有効にはたがせるための動力が「自由なる購買力」としての資本であり、その供給を業務とするものが銀行である。銀行による信用創造。かくて資本主義社會における銀行の地位の重大さと困難さが前面へおし出される。

資本主義社會に對するシュンペーターのヴィジョンはかくのごときものである。シュンペーターが「この定義にしたがうとき、經濟生活が私有財産で特徴づけられ個人のイニシアチブによつて統制されるような社會は、たとえば私有の工場・賃銀労働者・實物もしくは貨幣仲介の自由交換などが存在するとしても、それだけでは必ずしも資本主義ではない」というとき、シュンペーターの資本主義社會に對するヴィジョンが背後にあることを思ひ合せねばならない。

- (1) 本節の敘述は主として、H. ss. 80—139 および C. pp. 72—123 によつた。
- (2) あるいはケインズに隨つて「銀行システムは投資率を支配し得るか」という形で問題を提出してゐる。cf. J. M. Keynes, *A Treatise on Money*, vol. II, p. 339 ff. なおこの点について D. H. Robertson, *Banking Policy and Price Level* にはすぐれた分析がある（特にその第七章）。
- (3) 青山秀夫「經濟變動理論の研究、第二卷」八四—九四頁參照
- (4) C. p. 223.

三 「資本主義の成功こそが資本主義をくつがえす」

今までかなりの紙幅を、シュンペーターの資本主義の説明に費した。あるいは定義の穿鑿のために餘りに多くの紙幅を費したという異議があるかも知れない。一部の人たちの見方によれば定義はあくまで定義であり、言葉を使うという意味に使うかという約束にすぎない、したがってそれをいろいろ穿鑿して見ても意味のないことである、と考えられている。私ももちろんこの見方に全面的に反対するつもりはない。しかもなおシュンペーターの資本主義の定義に多くの注意を拂つたのは、シュンペーターの資本主義社會に對するヴィジョンがこの短い定義の中に最も集約的に盛られているからに他ならない。シュンペーターが資本主義の現狀に對して次の如き診斷を下すとき、彼の描いていた資本主義のヴィジョンをあの定義は最も端的に示しているからである。

▲資本主義の成功こそが資本主義を防禦する社會制度を覆すとともに、また資本主義の存續を不可能にしその後継者として社會主義を指名すること、諸條件を生み出す。

資本主義の衰退はその失敗のゆえでなく、むしろその成功のゆえである、というこの逆説的な診斷はいかなる根據に基いてなされたのか。暫く彼の主張を後付けよう。

資本主義の輝かしい成果の第一は、生産の飛躍的増大である。これにともない、すべての階級の生活水準は上昇した。しかしこれが資本主義に反抗的な階級を生み出していつた。この意味で特に注目すべきは、労働階級とサラリーマン階級とである。

労働階級については次のような極めて有力な見解がある。すなわち、一方における富の蓄積は他方労働階級の側における窮乏・労働苦・奴隸狀態・無知・兇暴・道德的墮落の蓄積となる。端的にいえば資本主義の進展とともに労働階級の生活水準は漸次に下落し、貧困の強化と失業の増加、その行きつくところは資本主義の廢止にいた

る。このような見解に對してシユンペーターは事實をもつて、資本主義が勞働階級の生活水準を向上せしめたことを指摘する。しかしその資本主義の成功によつて勞働階級は政治的勢力にまで成長し、資本主義に反抗する勢力を形成した。勞働階級は生活水準の下落によつてではなく、その上昇によつて資本主義の脅威となつたのである。³⁾

サラリーマン階級の成長は、一面において近代的大規模經營の成立により、他面において資本主義生産の増大にさへえられている。彼等は大規模經營の企業に職を得ている場合が多いが、その企業の利益とは無關係であり、時に敵對的な態度をとる。第一にサラリーマン階級は農業者や small businessman と合して、いわゆる新中間階級を形成する。これらはそれぞれ相互には甚だしく異つてゐるが、全體としては多くの場合同じように感じ、また行動する。第二に、基本的な態度としては、サラリーマン階級は勞働者階級の利益とも相反するが、大ブルジョアの利益に敵對的な点では勞働者階級と共通である。

資本主義の輝かしい成果として次に考へねばならぬものは經營の合理性の確保である。それには次の三つのことが含めて考へられている。第一に、近代的な經營は合理的な資本計算によつて緻密に計算され、周到綿密な計畫にもとづいて運營される、このために複式簿記のはたす役割についてはよく知られている。第二に、近代的な經營に従事する人々は、法によつて定められた權利を主張し義務を遂行する。雇い主と被僱者とは、傳統的な情誼や身分的な隸屬によつてではなく、質的に平等な主体間の關係として契約をむすび、かつこれを實行する。“Business is business” はこの場合においても一つの格律である。第三に、近代的な經營は各部各課が、全体として一つの機械のように組み合わされており、一貫した脈絡をもつて構成される。⁵⁾ 個々の従業員はルーチン・ワークとして、それぞれの職務を遂行してゆけば全体としての經營は圓滑に動いて行く。

近代資本主義經營の合理性は右の三つの事態を含めていわれることである。シュンペーターはこれについて立入った分析を行っているわけでもなく、またそれと前述の資本主義のヴィジョンとの關係を明かにしているわけでもない。この点は彼の分析の弱点と見られるがそのことは後に述べる。ただシュンペーターは、第一に、かかる經營の合理性がいよいよ徹底するに隨ひ、企業者職能の活動領域の狹められることを指摘する。彼が「われわれが自然界ならびに社會的環境を正確に知れば知るほど、また事實に對するわれわれの支配が完全になればなるほど、時間の経過にもなつて事物が簡單に計測され、しかも迅速かつ明確に計算されうる範圍が大となればなるほど、まさにこの（洞察と決斷との）能力の重要性はますます後退し、隨つて企業者タイプの重要性も低下して行かねばならぬ」と述べるとき、まさにこの事を言っているのである。第二に、雇い主と被傭者の關係が、忠誠心や身分的從屬の習慣を破壊して行つた。このことが大規模經營の機構性を高めるのに効果があつた。しかし他面、忠誠心や身分的從屬の氣持が皆無のときには工場の指揮・管理の效率的な運用が困難になるといふ側面がある。一般的にいって、専ら法的に同等な當事者間の自由契約の網に基礎をおき、すべての人が自分自身の功利的な目的にのみ赴くような社會組織は、理念的には考へ得ても、實際に動くことは出来ない。

獨占を資本主義の輝かしい成果としてあげることには恐らく異論があらう。すなわち、獨占は新機軸の所産として企業者によつて組織されたものであるが、それが輝かしい成果と見られることについては説明を要するであらう。この点彼の所説を要約しよう。第一に獨占的企業は、分散的なものに比して、一そうよくブレインを利用し得る。一ダースのブレインによつて統制される場合に比して、アメリカの農業やイギリスの炭坑業・纖維工業の現状は、消費者にとつてはるかに高價につく。第二に、更に重要なことは、獨占は「不斷の疾風」から經濟を防衛す

る。資本主義の競争は、新商品・新技術・新供給・新型式による競争であり、この競争の行きつくところ、單に企業の利潤を減少せしめるのみでなく、企業の存在自體に脅威を與える。この脅威から經濟を保護し長期投資に保障を與えるものは獨占である。なるほど、すでに古くからしばしば指摘されているように、獨占においては生産制限が行われ、現存の資本設備をフルに利用する場合よりも生産量の少いのが通常である。しかしこれによる損失と、「不斷の疾風」から經濟を防衛して長期投資を保障する利益とを較べるとき、シュンペーターは躊躇するところなく利益の方が大であるという。第三に、獨占は價格を固定せしめる。しかも通常自由競争價格より高い水準に。不景氣の際に獨占價格が固定されることは、投資者に對する不景氣の壓迫を緩和することになる。

これらの利点にもかかわらず、獨占の發達は逆説的にも企業者職能を壓殺し、資本主義の衰退を意味する。この見方は現在に於ける二つの代表的な獨占觀と鋭く對立する。一面に於いてマルクス主義者の見解、他面に於いてミゼス、ハイエクの見解と。

マルクス主義者の獨占觀はよく知られている。この考え方によると、技術的進歩は大量生産をますます有利にし、その結果小企業は次第に大企業に驅逐され、自由競争に代つて獨占が現れる。それは歴史の必然であり、人間の自由意思で排除し得ないと見る。その意味で獨占は「資本主義の最近の段階の最後の言葉」であり、「陰謀と詐欺の基礎」であるともいわれる。(レーニン) これに對してハイエクは「この主張は、技術的進歩に時として伴う一つの結果だけをとり出し、それと反對方向にはたらく他の諸結果を無視しており、事實についての嚴密な研究からはほとんど支持を受け得ない」と述べ「大經營の能率の方がすぐれているという證明は得られなかつた。競争を破壊すると考えられる利益なるものは、多くの分野については證明し得なかつた。なおまた大規模の經營の經濟が

存在する場合にも、それは必ずしも常に獨占を餘儀なくしない」という、「經濟力集中についての臨時國家經濟委員會」の最終報告を引用する。¹⁰⁾シュンペーターの獨占觀はこれら二つの見方と鋭く對立する。まず獨占が資本主義の成果である点においてハイエクの考え方と對立し、またそれが罪惡ではなくて輝かしい成果である点においてマルクス主義者の見解と對立する。¹¹⁾

要するに資本主義はその輝かしい成果として、生活水準の一般的な上昇を生み出したが、それは資本主義社會に敵對的な二つの階級、勞働階級とサラリーマン階級を生み出した。つぎに資本主義はその輝かしい成果として資本主義的經營の合理性を生み出した。しかしこれは企業者職能をせばめ、また資本主義社會の結合の紐帶をゆるめるはたらきをもっている。最後に、獨占もまた資本主義の輝かしい成果といえるが、それは新機軸の集團的出現を阻止し、資本主義の衰退をみちびく。まさに「資本主義はその失敗のゆえにではなく、その成功のゆえに行詰る」のである。

(1) *of Science and Ideology, American Economic Review, March, 1939*

(2) *D, pp. 61.*

(3) *C, pp. 637—638.* なお高田博士もこれと極めて類似した見解を述べておられる。高田保馬「マルクス批判」四四—五九頁。

(4) *C, p. 638, E, pp. 443—449, D, pp. 145—154.* なおシュンペーターは、社會の動きを財産所有者とプロレタリアとの對立をもつて説明する見解に對しては「簡明ではあるが非現實的である」として斥ける。またこの財産所有者とプロレタリアの對立というシエーマを維持するために、(一)「農業者や小商工業者は、長期をとれば、絶滅の道を辿っているから、中間階級の膨脹を助長しないであらう。」(二)「サラリーマンは筋肉勞働者と同様、實質的にはプロレタリアであり、プロレタリア戦線に眞の位置をとらねばならない。」という二つの命題をつけ加える論者がある。これに對してシュンペーターは、結局におい

てこの命題が眞實になるかどうかは問題でない。さしあたり、それが眞實でないことを述べれば充分であると答える。そして次のごとくいう。「この期間（第一次大戦以後の期間）に見られる限りでは、ある壓力を受けていたからサラリーマンの大部分はプロレタリア戦線に加わり得なかつたということは、とくに眞實でない。この壓力に關する主張は不適當な觀察の誤つた擴張である。(C. pp. 689—699)

(5) ひとつはここでコンダエアー・システムを想い起せばよい。しかし重要なことはこのような組織化が製造・加工の過程だけでなく、事務にまで及んでいることである。なお近代經營の合理性については、青山秀夫「近代國民經濟の構造」一一五頁以下および二一九頁參照。

(6) C. p. 689, E, p. 448. シュンペーターの分析がもつばら英米とくにアメリカの社會に向けられていることは注目に値する。すなわち彼においては *precapitalist attitude* の抑壓的な側面は考慮に入れられていない。このことはわが國の現狀に即して考へるとき特に考慮を要する。

(7) この点は D. に詳しい。

(8) このほかシュンペーターは獨占企業においては技術的進歩の採用が阻止されるかを問題にしている。しかしここでは省略する。

(9) かつてシュンペーターは、「新機軸の集團的出現を緩和するものとして、好景氣のインフレーションならびに沈滞のデフレーションの力を滅殺するものとして、隨つて景氣循環や恐慌の危險およびそれにもかからず出現する恐慌類似的諸現象の結果を緩和する有効な手段」として獨占を特徴附けている。(B. s. 367)

(10) F. A. Hayek, *The Road to Serfdom*, 1944. はこの点最も注目すべき文獻である

(11) この点更に立入つて論ぜねばならないが、後日に譲る。

四 社會主義への進行

資本主義の成功こそが資本主義を行詰まらせる。これがシュンペーターの基本的命題であつた。資本主義に續いて現れる社會は社會主義である。シュンペーターが社會主義と呼ぶものは如何なる内容のものであるか。次にこの点が問われねばならない。

シュンペーターは社會主義を「生産手續が統制され、何をいかに作り、誰に與えるかの決意が、私有私營の企業によつてではなく、政府當局によつてなされる經濟組織」であると定義する。ここでシュンペーターの社會主義の定義を最も特徴的に性格づけるものは、生産・分配のプロセスを管理するための巨大な官僚機構の存在である、もちろんこの巨大な官僚機構は民主的に運営されていることもあり、非民主的に運営されていることもある。しかしそれはこの定義にとつてはどちらでもよい。また社會主義社會が分權的であることは右の定義に抵觸しない。それは恰も軍隊において下級部隊の指揮官のイニシアチブを否定し得ないのと同様である。さらに上記の社會主義の定義は必ずしも競争の機構を排除するものではない。社會主義社會において消費者の選擇や職業選擇を認めることは、事實上困難であるとしても、論理上不可能なことではない。この点、ランゲ、ラーナーのモデルは参照に値する。

資本主義社會においては、新機軸をまかなうために信用創造が決定的に重要な役割を果した。信用創造によつてつくり出された「自由なる購買力」が、財貨の一用途から他の用途への轉換を可能ならしめた。しかし社會主義社會においては、財貨の用途の轉換には、信用創造を必要としない。社會主義國家の中央當局は現存の生産手段をすべて統制しているから、何か新機軸を實行するにあつては、ある生産資源を擔當しているものに、その生産資源の一部を引上げ、新しい用途に振向けるよう、命令を出しさえすればよい。この点においても資本主義と社會主義と

はその性格を異にする。³⁾

社會主義をこのように理解したとき、現在において顯著な事態は、資本主義から社會主義への轉移が行われつつあること、これである。シュンペーターは、さきに資本主義の行詰りとしてかかげた諸事態をもつて、この傾向を示すものと見る。すなわち、これらの諸事態のうちに「私人にとつて運営されていた産業や交易が、國家によつて次第に征服されて行く過程」が見得ると考えるわけである。シュンペーターが“the march into socialism”とよぶのはまさにかくの如き推移である。

この推移において特に注目には値するのは戦争の影響である。⁴⁾過去においては、戦争に勝利を収めたならば、その國の支配階級の威信は高まり、その階級を中心とする社會機構は強化せられた。しかし現代においてはもはやそうでない。戦争の壓力は戰勝國にも大きい影響を與えるようになった。現に第一次大戰はヨーロッパ諸國に大きい影響を及した。とくに戰敗國においては社會構造に火がつき、社會主義への潜在的傾向は表面にあらわれ、短い期間ではあるが、あらゆるものをそれにさらした。しかし特に重要なことは、小規模ではあるが、戰勝國においても同様の傾向が見られたことである。フランスにおいては、一九四年以來ブルジョア共和國はそれ以前のような機能を果さなくなつた。イギリスでは社會主義者ではないが、社會主義陣營に影響を受けた労働黨が次第に勢力を得て來た。そしてイギリスにおいても、フランスにおいても、私企業に對する政治部門の態度が根本的な變化を示した。すなわち、第一次大戰後、戦時の經濟政策に對する怨嗟が次第に昂まり、統制の續行に對する賛成者が全くなかつたにもかかわらず、結局戦前の政策への復歸の不可能なことがわかつた。その最も顯著な例は、イギリスにおける金政策と、その究極における失敗とである。

世界恐慌と第二次大戦とが社會主義への推移に拍車を掛けた。そして今度はアメリカも例外ではなかつた。五十年前以前には、その一部分が課せられたとしても耐えられなかつたような財政的重荷が、いまやアメリカにおいて甘んじて受入れられるようになった。

(1) E. pp. 446—447.

(2) C. p. III.

(3) シュンペーターはこの点について、「もしわれわれがマルクス主義者の國家の理論を考慮に入れるならば、この同じとが、古典的社會主義學說によつて國家の死滅 (withering away of the state) と書かれている、あの表面的な逆説は容易に理解される」と言っている。(E. p. 446) なるほどマルクスの國家觀を考慮すれば「國家の死滅」とシュンペーターのいう the march into socialism は同じことになりそうである。しかしこの場合シュンペーターの社會主義が官僚機構 (bureaucratic apparatus) と不可分の關係にあることを忘れてはならない。

(4) これからあと、戦争の影響についての考察は主として E. p. 451 によつた。

(5) シュンペーターが the march into socialism というとき、決して社會主義を喜ぶべきもの、あるいは讀むべきものだと思つてゐるわけではない。シュンペーターは常に、「豫言する意圖をもたず、單に事實を認め、その事實の指示する傾向だけを指摘しよう」とする。(E. p. 447)

五 資本主義最近の段階としての勞働主義

資本主義から社會主義への轉移は最近の支配的傾向であるが、その轉移の過程の一段階として現れ、社會主義と嚴密に區別を要するものは勞働主義 (laborism) である。¹⁾ シュンペーターによれば、勞働主義とは、正統派社會主義者が往々侮蔑的な語感をこめて「修正主義」(reformism) とよぶものであり、經濟政策もその他の政策も勞働者の

利益にのみ、(例外的には農民の利益のためにも)行われる。労働主義の成立とともに現れる種々の事柄のうちで特に経済學者の關心のまゝとなつてゐるものは次の二つである。

(i) 賃銀契約及びそれに關連するすべてのことが政治問題化し、すでに市場の力だけで解決される事柄ではなくなつた。

(ii) 租税・公共支出は支配階級たる労働者の收入を極大化し、賃銀以外の收入を極小化する。

労働主義が最も顯著に現れてゐるのはイギリスである。イギリスについていえば「今までに、その(國有化された)すべての部門には、鐵鋼業においてすら、社會主義とは異なる他の動機、すなわち國有化された部門に特有な動機が存在することが證明された。そしてイングランド銀行・鐵道・鑛業・公共用役業その他の國有化を、社會主義化の意圖の積極的な證明にすることは殆ど不適當である。もちろん社會主義的側面は強調されている。さらにまた國有化に伴つて私企業のパボタイジユの起りつつあることも事實である。最後に労働黨の政策は、それ自体社會主義ではないが、社會主義への道、とくに社會主義へのイギリス的な道を鋪裝するものであるかも知れぬ。しかもなおこれらを根據として社會主義への傾向を見出だそうとするならば、これらの表面的な事實にとどまらず、さらに進んで經濟的過程や文化的過程へ深く入りこまねばならない。」要するにシュンペーターは「今日イギリス労働黨によつて唱道され、實行され、提案されてゐるすべてのことは、社會主義とよぶよりも、むしろ労働主義とよぶ方がよい」と結論する。

労働主義が現在もつとも顯著にあらわれているのはイギリスであるが、イギリス以外の國々でも多かれ少かれ労働主義化している。かくてシュンペーターはいう。

い⁶⁾ **「労働主義こそが資本主義の最近の段階の政策であり、マルクス主義者がいう如く、帝國主義がそれなのではない。」**

(1) このような労働主義は必ずしも、經濟活動を私的な側面から公的な側面へ移すとは限らぬから、社會主義とは區別を要する。F. pp. 372—373.

(2) 「國有化に伴つて私企業にサボタージュが起りつつある」ということは一見些細なことのようにであるが、資本主義における企業者の行爲を決定的に重視するシュンペーターにとつてはかなり重大なことである。

(3) F. p. 373.

(4) 労働主義が社會主義への道だとする見解がある。たとえば、サー・スタフオード・クリップスは「われわれの立場たる社會主義の基本的な性格は、社會の組織方法に存するのではなく、われわれの目ざす高い目的に存するのである」といつている。學者の中にも同様の見解をとるものが多い。然しシュンペーターはこのような見解をとらない。

(5) シュンペーターは、最近における労働主義が間接には經濟理論の中へも採入れられていることを指摘している。ピグーの「失業の理論」における貨幣賃銀の硬直性の想定、あるいはケインズにおける労働の供給函數などはその例の顯著なものといえよう。

(6) F. pp. 375—376.

六 合理的・非合理的

以上少しく補整を行いつつシュンペーターの資本主義論を要約して來た。しかし彼の見方にも問題点がないわけでない。それらの点を指摘して若干の覺書を附することにしよう。

シュンペーターは經濟的行爲を二種の型に分ける。一は慣行の軌道にしたがう「單なる業主」の行爲であり、他

は新機軸をめざす企業者の行爲である。シュンペーターが前者を合理的行爲とよび、後者を非合理的行爲とよぶこともすでに述べた。しかし慣行の軌道にしたがう行爲を合理的行爲と等置することには若干の問題がある。なるほど慣習は、素朴ではあつても過去における思考と経験による試行錯誤の堆積であり、交通運輸の機關が発達せず企業の規模が小さく競争も微弱な時代には、特に慣習が行動の指針として有效なはたらきをもつ場面が多い。「もし村の鍛冶屋が鋤を村の人以外には賣り得ないし、また村の人もその鍛冶屋以外からは買ひ得ないとすれば、慣習によつて價格が適當なところに固定されれば皆の利益になる」(マーシャル)。この意味では慣習は決して不合理なものではない。しかしそれはまた合理的な思考と計算にもとづいてゐるわけでもない。不合理というよりは非合理的といった方がよい。まして傳統的な情誼や身分的隷従にもとづく、無批判的な行爲が非合理的なことはいうまでもない。シュンペーターのいう「慣行にしたがう行爲」は、このような行爲を含まず、ただ與えられた條件の下で最も有利な結果を求める行爲だけに限定されている。慣行にもとづく非合理的行爲を考慮のそとにおくことは pre-capitalist attitude の否定的側面に對する彼の無關心を示している。

つぎに、前述の如く、近代資本主義經營の合理性と彼のいわゆる企業者の非合理行爲との關連について、彼は立入つた分析を加えていない。この点少しく補整を加えよう。まず企業者の職能と資本主義的經營の合理性とはそれ自体矛盾するものでない。資本主義的經營がどこまで機構性を獲得したとしても、企業の最終的意思決定がルーチン・ワークとして行われることはあり得ない。經營が組織化され個々の従業員は一つの物理的裝置に次第に近づいてゆくにしても、企業の内部には最高の經營指導者が必要であり、この經營指導者は決意と勇氣と洞察とをもつて事に當らねばならない。少しく逆説的な表現をもつてするならば、資本主義的經營の合理性に魂の息吹きをふき込む

のは、他ならぬ企業者の非合理的行爲である。企業者の決意と勇氣と洞察によつてはじめて資本主義的經營の合理的運營が可能になる。さらに逆説的な表現をもてあそぶならば、資本主義的經營の合理性そのものが、非合理的な企業者の行動の所産として生み出されたといえぬであらうか。周知の如くシュンペーターのいう新機軸の中には新組織の達成という項目が含まれている。彼がそこで例としてあげるのは、もつぱら獨占の達成あるいは打破である。しかし新組織の達成をそれに限局せねばならぬ理由はない。合理的經營の達成も新機軸の成果と見てよいであらう。このように考えると、既述の「經營の合理化が却つて資本主義の衰退を導く」という彼の見解が首尾一貫したものである。

しかし企業者活動を非合理的とみる彼の觀點についてはまだ問題が残っている。企業者の職能は單なる計算やルーチンによつて果すことが出來ず、決斷と洞察と勇氣とを必要とする。この意味では確かに非合理的である。彼はこの非合理性を強調することによつて、クルドやベルグソンが社會進歩に適用した觀點を經濟の世界に擴張援用し得たのである。しかしこの擴張援用には問題がある。

さきに簡單にふれておいたようにベルグソンにおける「開いた社會」は「開いた魂」によつてになわれている。開いた魂は人間の意識の深い層によびかけ、それを強く搖動かす。人間の意識の深い層というのは、知でなく情である。情緒へのよびかけを通じて社會の進歩が生まれる。「創造は何よりもまず情緒である」(ベルグソン)。聖者・英雄・預言者など一般にカリスマといわれるものはこの創造の擔い手であり、シュンペーターの企業者はこれを經濟の世界へ翻譯したものである。しかし經濟の世界はしよせん算盤勘定の世界であり、人間の意識の浅い層の事柄である。企業者職能が決斷と勇氣と洞察とを必要とするという意味で非合理的であるとしても、それは決して

人々の情緒に深い衝撃をあたえるという意味で非合理的なのではない。要するに經濟の世界は、いわば「土うすき礫地」であり、もともとカリスマの發生にとつては適せぬ土地である。シテンペーターの擴張援用に難点の存するのはこの故である。²⁾

(1) cf. A. Marshall, *ibid.*, Appendix A.

(2) この点は更に深く立入つて論ぜねばならないが、いまは紙幅の制限がこれを許さない。別の機會に詳しく論じたい。
〔附記〕 シュンペーターの諸論者を引用するにあつて、一々書名を書きしるす煩を避け、ローマ字記號を用いた。劈頭に列擧した文獻の上に附した記號である。